愛建協・中部地整・建通新聞

建設業女性就業者座談会

愛知県建設業協会（藤本和久会長）と国土交通省中部地方整備局、建通新聞社は29日、名古屋市内で「働きやすい建設業に変わるために」と題して、建設業女性就業者座談会を開催した。土木や建築の施工管理、鉄骨検査の第一線で活躍する女性の技術者・技能者７人が一堂に会し、働きやすい就業環境などについて意見を交わした＝写真。

「働きやすい建設業」で意見交換

「休日の取得状況」については、「どうしても取らなければいけない休日は1カ月ほど前から現場の状況を踏まえ計画的に取得する」「法律や社内規定で網羅できないケースは、個々それぞれの状況に合わせ上席者などと調整している」「依然と比べ会社側も一緒に考え、臨機応変に対応してくれるようになった」などの意見があった。

「女性が働きやすい環境」については、「その場その場でがむしゃらにやってきた。ただ、頼めることは頼むことが必要。誰もが誰かに支えられて仕事しているのだから」と、会社や家族、現場の仲間とのコミュニケーションが必要であるとの意見が共感を呼んだ。

「男性側の意識の変化」では、「女性が初めて男社会に飛び込むのは勇気がいる。自ら開いていくことが大切であり、自身の居場所は自らつくるしかない」と力強い意見がある一方で、「仕事に関する厳しい指導はあるが、フォローしてくれる優しさが変わってきた」という事象を紹介してくれた人もいた。また、「微妙な距離感を埋めるには、小さなことから少しずつ摺り合わせていくしかない」という意見もあった。

反対に「女性側の意識」については、いやな思いをした経験はそれほどないという意見が多かった。「女性側より、受け入れる男性側に抵抗感があったようだ」「自分なりの道を模索しながら立ち位置を定めていくようにした」という意見が聞けた。

また、「竣工を目指す〝仕事仲間〟という気持ちであれば男性も女性もない」「体力差は当然あるが、現場を管理するという立場で性差は関係ない」といった意見があった。その反面で、「現場の管理者として一人前と認めてもらえているのか不安になることがある」といった不安を吐露する意見もあった。

「長く働くには」のテーマでは、「今の仕事を続けながら、女性ならではのライフイベントをクリアできるか自信がない」「現場管理という仕事は好きだけど、家庭を持った際、現実にできるのかという疑問はある」という意見が出た一方で、「自身のミスを指摘されなかったことがある。配慮され過ぎるのはよくない」「現場で働いていられるのは若いし独身だから。将来のビジョンは見えていない。働き方について会社側と摺り合わせしておく必要がある」と、状況に応じて働き方を変えていく必要性を感じているという報告もあった。

出席者は、川北真伊さん（大島造園土木）、ウリエル・ガリード・ガデアさん（オノコム）、菊池麻耶さん（瀧上工業）、村田史子さん（徳倉建設）、久名木侑紀さん（トヨタT&S建設）、谷崎祐子さん（乃一）、村田由里（村田工業）の7人。司会はキャリエラの倉橋和世社長が務めた。

当日は、同協会の大西克義専務理事があいさつし、中部地方整備局の黒田良一建設産業調整官と同協会の高橋輝明労務委員長が講評した。

（詳細は後日掲載）